

# 百 姓 の 犬

(短編小説)

アルバート・マルツ著  
坂 本 肇 訳

去年、ロンドンで、ぼくは友人たちとドッグショーに出かけた。友人というのは、生理学者のヒュー・スチュアートと、その妻のリビーのことだ。品評会場で、ぼくたちは、エドモンド・ドーナトという男に会った。かれはポーランド生まれで、リビーが速記者として働いている会社の化学者だった。お茶の時間に会場に出ようとした時、リビーがいっしょにドーナトを誘った。かれは、とてもはにかんでいたが、見るからに嬉しそうなようすでついてきた。ずいぶん孤独な人生を送っているのが知れるようだった。背が高く、すこし猫背で、頭はほとんど禿げている。人好きのする顔だちに涼しい黒い目をしていたが、顔色は不健康なほど蒼白かった。歳は五十五くらいに見えた。ぼくは、あとでそれより十歳も若いと知っておどろいた。リビーの話によると、かれは第二次世界大戦中に強制収容所に入れられ、その時チブスにかかった。今でも神経障害で苦しんでいた。リビーも、それがどの程度なのか知らなかった。

かれが紅茶を注文している時に、ヒューが、犬の頭のよさなんて高が知れているじゃないか、と優しい口調で妻のリビーをからかいはじめた。会場に入るとすぐに分かったことだが、リビーが無類の愛犬家であり、ヒューは夫としての妥協精神からしぶしぶついてきていたのだ。かの女が犬をすばらしいなどと賞めようものなら、かれは「ねえ、君、ぼくはその種の犬を解剖したことがあるがね。その脳味噌ときたら大豆くらいの大きさしかないんだよ」とか「何世代にもわたって生まれつきのものだがね。神経系統もお粗末なものだよ」とか小声でいった。リビーは夫の言葉など気にかけていないようすだった。だが時

どき、ひじで夫を小突いては「お黙りなさい、魚好きさん」といった。そして夫がちくりちくりと冷やかしつつけるのを寛容にほほ笑みながら眺めていた。やがてかの女は、ふきだしそうに笑ってドーナトにいった。「わたし、だれと結婚しているかお分かりになる？この人ったら、犬なんて大したものじゃないからって、それだけで犬嫌いなものよ」それから夫に向かって、「お婆かさん。あなた、コリーのような羊を飼うことができて？わたしはね、犬が犬だから好きなのよ。たとえタコの方がもっと賢いって、あなたがおっしゃろうともね」

「タコは頭がいいんだよ、君。自分が食べたいと思うハマグリを道具を使って開けたりするしね。犬はいろんなことを教えこむことはできるけど、頭はよくないね」

「ぼくがコメントしてよければ」とドーナトが口をはさんだ。「犬の頭の働きには、人間と同じようにとても大きな幅があるとぼくは信じているよ。りこうな犬になると、理性的な判断のできるのが確かにいるんだ」

「具体的な証拠でもあるのかね？」とヒューがたずねた。

「あると思うね」

「どんな証拠だい？」

「ぼくは、かつてある犬がとても困った立場に立たされたのを見たことがある。その時、犬はどうするのがいちばんいいかを自分で考えたんだ、とぼくは思っている。でも、短い言葉でその証拠を話すわけにはいかない」

「ぼくらは急いでいないから。どうか話してくれないかな」

ドーナトは、ぼくたちが本当にかれの話を聞きたがっているのか確かめでもするかのように、ぼくたち三人の顔を一人ずつ見ていった。

リビーが「お願い、ぜひ聞かせてくださいな」と熱心にいうと、かれはうなずいて、恥ずかしそうに笑いながら話しはじめた。強いなまりがあったが、その英語はなめらかだった。

「その犬の名前はパニといった。ポーランド語で『マダム』とか『ミセス』という意味だがね。でも、ドイツ軍が三十九年にポーランドを侵略した時、ぼ

くはワルシャワに住んでいたんだ。それをまず最初に説明しなきゃならんだろう。父は、母とぼくを三十マイルほど田舎の、父が所有していた農園に疎開させたんだ。その後、父をふたたび見ることはなかった。かれは軍隊に取られ、戦死した。だが、それは別の話になる。

「ぼくの家族が休暇をよく過ごしていたその農園に、一軒の家があった。十エーカーばかりの土地があって小作農の一家が働いていた。ぼくは、その息子たち二人と仲よしだった。一人は、ぼくと同い年で十七になろうかという頃で、もう一人のアンテークは一つ年上だった。パニは家中のだれのいうこともよく聞いたが、とりわけアンテークの犬だった。パニとアンテークの間には通じあうものがあった。並はずれた愛情関係があった」

ドーナトは、この辺りまではごく普通のようにすで話していた。けれど、話がかれの友人と犬との結びつきのことになると、眼が輝きはじめ、それからしだいに生き生きとしてきた。

「一九三九年十二月、ドイツ軍がポーランド全土を支配下に収めた時、やつらは、グレートデンも、ドーベルマンも、ドイツ・シェパードも、そのほかの犬も、純血種の犬は一匹残らず軍当局に引き渡すようにとの命令をだした。ほかの犬は皆殺しにするようにとのことだった」

「どうして殺さなきゃいけないのかしら？」とリビーは憤然として聞いた。

「殺したっていいのじゃないかね？」とドーナトは笑いを浮かべて答えた。

「それは、情け容赦ない戦争をやっているドイツ軍指令部の下した合理的な決定だったんだ。かれらは警備用の犬を必要としていた。そうでない犬は、かれらにとってむだ飯食いというわけだ。事実、やつらは人間を多かれ少なかれそのようなものとして見ていた。そう、アンテークはそれを聞くとすぐにパニを納屋に隠した。ただ閉じこめただけじゃなかった。床の下にちょっとやそっとでは見つからないような隠れ場所を作ってやったんだ。夜になると運動に連れ出し、昼間も何度となく犬のところへ行っていた」

「その犬は吠えなかったのかい？」とヒューがたずねた。

「うん、ぜんぜん。アンテークが納屋に入ってきてても吠えなかったね」

「口輪でもかけてたんだろう？」

「いやいや、かれが吠えないようにといい聞かせたからなんだ」

ヒューはいぶかしそうに眉をあげた。ドーナトはそれを見てかすかに笑ったが、べつに何も説明しなかった。

「一週間ほどたってからだか、朝早く軍用トラックが農園にきた。黒い制服を着た三人のナチス親衛隊員にポーランド人の通訳がいた。この通訳というのは、国境近くの出身の裏切り者だ。トラックの中には、犬が二匹鎖で横板につながれていた。うん、家中みんないた。ちびイタチ野郎の通訳がアンテークの親父に横柄にいうんだ。『犬はどこにいる？』って。答えたのは若いアンテークだった。『一匹だけいたけど、何週間か前に死んじまったよ』これを聞くなりイタチ野郎は高笑いをして、『このあたりじゃ、ペストでも流行ったと見えるな。犬が何匹も最近死んじまったわけか』といった」

ドーナトは一息つくと頭に手をやり口ごもるようにいった。「敵は憎いだけだ。が、国を裏切ったやつには、やり場のない怒りで身を焼かれる思いがするね。それはともかく、このイタチがドイツ語に通訳すると、頭分の伍長が何かびしゃりと命令した。それからそいつが、その伍長なんだか、アンテークのそこへ歩み寄り、拳銃をかれの顔に向けて構えた。アンテークの母親は非鳴をあげて駆けよった。だが、親衛隊員の一人がぐいと引き止めたので母親は転倒してしまった。ぼくたちは痺れたように立ちすくんでいた」ドーナトは息のみこみ、また頭に手をやった。「イタチがアンテークにいうんだ、『これから十数える。犬がどこにいるかそれまでにいわないと、そのドイツ兵がお前を射殺する。脅かしじゃないぞ』そしてかれが一、二と教えはじめもしないうちに床に倒れていた母親が金切り声をあげた。『犬なら納屋だよ！』って」

またドーナトは言葉を切り、それからとても静かに話した。「ぼくは、母親を見た時のアンテークの目つきを決して忘れないだろうね。まるで母親がかれを裏切ったかのようなようだった。魂も凍りつく一瞬だった」

話がここまでくると、ヒューが深い関心を見せてたずねた。「アンテークはしゃべらなかつたと思うかね？」

「それはどうかな。ぼくがあとでかれに聞いたら、かれは自分でも分からないと正直にいていたがね。でも、その時のぼく感じでは、犬はかれにとって家族のだれよりもかけがえのないものみただった。たぶん、かれはしゃべらなかつたんじゃないかな。ともかく、母親が白状するとイタチ野郎はげらげら笑って、『お前たち百姓はほんとに器用だな！死んだはずの犬がいつでも納屋でぴんぴんしてるんだからな』といった。うん、それで父親がパニを連れにやらされたというわけだ」

「その犬、純血種だったの？」とリビーがたずねた。

ドーナトは首を振った。「雑種だよ。ぼくたちはドイツ兵がパニをぜったいに撃ち殺すと思ったね。当然だがアンテークはすごく取り乱した。通訳に泣きつきはじめて、パニはすばらしい犬なんだ、百パーセントの純血種じゃなくたって連れて行くように伍長に頼んでくれ、とか何とかいったんだ。かれはすっかり取り乱していた。すすり泣いたかと思うと、ほとんど訳の分からぬことをいったりするんだ。そのようすがドイツ兵の好奇心をそそったんだと思うよ、やつらはイタチに通訳しろといったからね。うん、やがてパニが連れてこられるのが見えた。パニのこと、どう話したらいいかな。おっきな犬なんだ。ドイツ・シェパードよりでっかくてね。胸なんか実にすばらしいんだ。グレートデンそっくりの口とあごをしててね。毛は短いが茶色で、尻尾はふさふさとして、首の回りに幅広い黒い輪をつけてたな。ぼくたちは、よくパニの血統を考えてたもんだ。実際、パニのことは何も分らなかつた。小犬の時に迷子になっているのをアンテークが拾ってきたんだ。いろんな血が混ざっているの是一目で分かったよ。まるで大きなボクサー犬とラブラドルをかけあわせて、その子を今度はシェパードとかけあわせたようなものさ。それからグレートデンやマスティフともね。このあらゆる異種交配から、それぞれの親のいい所だけを受けつくだような犬が生まれたんだね。その犬が人を見る眼はいかにも利発

そうで、茶色の眼には知性があふれ、歩きぶりはとても力強く落ち着き払っているのに、王者のようだといってもよかった。ドイツ兵がパニに関心を示したのは間近いかなかった。もちろん、アンテークも嘆願するのをやめなかった。上官にパニを見せてくれるようにと、通訳を介して伍長に頼んだ。パニはいわれたことを他のどんな犬よりも速く覚えるし、とことん忠実な犬だからと、かれはあらゆる聖徒の名にかけて断言した。うん、それでけっきょく、伍長が断を下して、パニを連れて行くことにしたというわけだ」

ヒューがたずねた。「で、その犬はトラックに乗せられまいとして暴れなかつのかね？」

「いや、アンテークが自分からトラックに乗って呼びよせたからね。パニは他の犬のように口輪をかけたり、鎖でつないだりしなくても大丈夫だと、かれは伍長にいていたけど、伍長の方が聞かなかったので、けっきょく伍長の言葉にしたがった。それからかれはパニを両手で抱きしめると、ちよつとの間何か話しかけていた。トラックから降りてきた時、子どものように顔を泣きはらしていたよ」

「何か話し合いでもついたのかしら。パニをどうするかということでアンテークにあとから知らせるというような？」とリビーがたずねた。

ドーナトは笑った。「侵略者たちは話し合いなどしないよ。アンテークが知るかぎり、それはどっちみち別れだった」

「だが、それが別れじゃなかったんだろう？」とヒューがいった。

「そのとおり。五か月後にぼくたちはパニと再会したからね。というのは、アンテークとかれの弟とぼくの三人は、非合法のレジスタンス・グループに加わったからなんだ。ぼくたちはある晩のこと、使命を帯びて外出したが、夜間外出禁止時間に通行許可証を持っていなかったため逮捕されてしまった。ワルシャワでひと月ぶち込まれたあと、アウシュビッツの強制収容所に送られた。ぼくらにとって幸運だったことには、そこにはほんの二、三日いるだけですんだことだ。ほんとに運がよかった。ぼくたち二人は、千人ぐらい入れられてい

る強制労働収容所に送られた。ぼくたちの仕事は新しい飛行場からハイウェイへの道を造ることだった。夜明けからまっ暗になるまで毎週七日間、辛い労働だった。食べ物は惨めなものでいつも足りなかった。だが、もし人がはなから丈夫ならそれでも生きのびられるだろう。運がよければの話しだがね。運がよければというのは、アウシュビッツへ送り帰されてしまうような病気やけがをしなければ、という意味でいってるんだ。ありがたいことに、ぼくたちには一つだけ特典があった。週に二回、沼地で水浴することが許されたおかげで、シラミにたかられずにすんだ。ええ、そう、ぼくたちが収容所へ着いた時、パニはいなかった——少なくともぼくたちは全く気がつかなかった。しかし六月のある朝、パニが別の作業部隊に付いているのをアンテークが見たんだ」

ドーナトはちょっと休んで頭に手をやった。何か感情が高まるといつでもそのようにするみたいだった。それからまた話しつづけたが、声が少しかすれていた。「アンテークがその晩どんなようすだったか、うまく伝えられるといいんだけどな。ぼく自身はパニに気づかなかった。アンテークとぼくは同じ作業部隊にいたけれど、作業中は話したりできなかつた。バラックに戻ってきて、初めてかれはぼくに話すことができた。かれはたったいまわが子を埋葬してきた男のような顔をして、ぼくのところへきた。眼も顔もぎらぎらしていた。かれがいうには『パニがここにいるんだ。なのに、おれを覚えていなかった！』それで、ぼくは二つ三つたずねて事情を知ったわけだ。

「しかしまず最初に、そこでのぼくらの状況について重要なことを理解してもらわねばならない。作業部隊には約四十人いたが、それが二人のカポと二人の親衛部隊と三匹の犬で見張られていた。カポというのは、ぼくたちと同じ捕虜なのだが、そいつがこん棒を手にして監督のように取り締まっているんだ。カポはその汚い仕事をして特別な特権を与えられていた。カポになるのは犯罪歴のある者が多かった。かれらは人間性を喪失した野獣だった。しかしカポとか、ライフル銃や軽機関銃をもった親衛隊員の見張りがいたにもかかわらず、意を決して脱走しようと思えばできないことはなかつた。そりゃあ、なかには

殺されたり、捕まったりする者もいる。でも、うまく逃げおおせる者もいる。それにぼくらの多くは一か八か脱走しようと思うほど絶望的になっていた。ぼくらを阻んだのは犬だった。それらの訓練された犬がぼくら捕虜に対してどれほど狂暴だったか、分かってはもらえないだろう。ところで、ぼくたち捕虜はみな同じような格好をしていた。同じように横縞模様の囚人服を着せられ、同じように頭を坊主に剃られていたんだ。作業現場には親衛隊員に付いて犬が一匹いて、あとの二匹は周辺を警備している。つまり、それがぼくらに許された外側の線というわけだ。もしだれかがその線の十フィート内に近づくと、そこにいる犬が立ちあがり、血も凍るようになり声をあげ、同時に見張りに知らせる。警告もしないで五フィートに近づこうものなら、犬は気が狂ったように猛烈な勢いで襲いかかってくる。二週めに入ったばかりのある日、雨の降るなかを男が一人ぬかるみで足を滑らせ土手に転がり落ちて、その警備線を越えてしまった。見張りが駆けよってきた時には、顔は見分けがつかず、のどを食いちぎられてその男は死んでいた。恐ろしい犬たちの前でぼくら全員を震えあがらせるには、それで充分すぎるほど充分だった。たとえ撃たれないで森の中に逃げこんだとしても、犬たちが遅かれ早かれぼくたちののどに食いついてくる**こ**とがぼくらには分かった。そうなんだ、、、アンテークがそれほど心を痛めたのもこれでよく分かると思う。その朝、ぼくらの作業部隊が点呼を取られている時、かれは外側の列に立っていた。別の部隊がぼくたちのそばを通り過ぎた。かれはパニが二ヤードと離れていない所にいるのに気づいた。見張りの鎖につながれているのをね。当然ながらかれは犬に呼びかけようとしなかった。その時かれをびっくりさせたのは、パニがとつぜん首をむけてかれの方を見たからだった。かれの話によると、パニはじっと三十秒ほど見つめていたが、かれだと分かったようなそぶりは何も見せず、人が他人を見るような見方ただかれの方をじっと覗んでいたんだ。それから、その作業部隊は向こうへ移動していった。しかも、アンテークがいうようにパニは人間じゃなくてただの犬なのだから、もしかれを完全に忘れていなかったら反応を示さないようなこと



はできるはずはなかった」

「その犬、かれを忘れてしまっていたのかしら？」とリビーは夢中になってたずねた。「わたしには分からないわ。りこうな犬ならわずか五か月くらいで飼い主を忘れるはずはないけど」

「まあ、ちょっと待って話を聞いてくれないか」とドーナトはいった。「アンテークを最も悩ませたのは、ナチス親衛隊がかれの愛するパニをほかの犬のように狂暴な野獣に変えてしまったのじゃないかということだった。かれはぼくにこういった。『こんなことならパニのやつ、死んでいた方がよかった。やつらがパニをこんなふうにするなんて、おれ、夢にも思わなかった』ってね。ぼくは、かれに次のようにいったのを覚えている。慰めるつもりでいったのだが、慰めにはならなかった。ぼくはいった。『やつらが小学生や中学生を人殺しの親衛隊員にすることができるとすれば、犬を人殺しにするぐらい、もっと簡単じゃないのかね？』と。アンテークはぼくを見つめてただけで向こうへ行ってしまった、、、ええと、それから一週間ほどたって作業部隊の警備が交替した。新しい親衛隊員の一人に付いてパニがきた。パニがぼくらの作業現場の周辺に配置されているのを初めて見た時、ぼくはパニをほかの犬と同じように恐れ、憎んだ。しかし二日目になって、パニの態度に妙なところがあるのに気づいた。アンテークが作業をしていてどこでもパニの視界に入ると、パニがそっとかれを見ているような気がぼくはしたからだ」

ヒューがいった。「その犬は、アンテークだということを知っていながら黙ったままでいた、と君はいおうとしているのかね？ちょっと信じられない話だな」

「アンテークも同じことに気づいたんだ。ぼくたちはどう考えたらよいか分からなかった」

「パニは、あなたにはどのように反応したの？」とリビーがきいた。

「歩いて行く時にも作業中にも、ぼくはめったにパニの近くにいなかった。一度、ぼくが近くへ寄ると、パニはアンテークを最初に見た時と全く同じよう

にぼくの方を見た。ぼくは、それをどのように考えたらよいのか分からなかった」

「それでその犬、捕えられていたほかの捕虜たちにはどんな態度に出たのかしら？」とリビーがたずねた。

「ほかの犬と変わらなかったね」

「だれかに襲いかかったこともあるの？」

「そのことを今すぐに話したいと思うよ。ええ、そう。それから一週間たった朝、アンテークがぼくにいった。『きのうは眠れなかった。パニがおれを知ってるってこと、絶対に間違いない。確かめてみるつもりだ』と。どうやって確かめるんだとぼくは訊いた。そりゃ分からないけど、何か方法を考えてみる、とかれがいった。二日後にかれはその機会を作った。くる日もくる日もパンとイラクサのスープだけの昼食が終わったあとだった。ホイッスルが鳴ると、アンテークはすばやく立ちあがり、手押し車を押して行った。パニのそばを通りすぎる時に、かれはそれをひっくり返した。砂が山と積んであったのだ。へまを仕出かしてカポに蹴とばされながら、かれはシャベルを取りに走った。うん、ぼくは、かれがシャベルで砂をすくい上げているのがよくみえ、それにまたパニの動きもよく見える位置にいたんだ。暑い日だった。パニは茂みの陰に横になって大きな舌をだらりと垂らしていた。砂は犬のいる所から約四ヤード離れた固い地面の上にこぼれ落ちていたが、一部はもっと犬の近くにも散らばっていた。アンテークはシャベルですくいながら、少しずつパニの方へ近づいていた。後でそれと知ったのだが、その間かれは、低い声でパニの名前を呼びつづけていたのだ。かれが危険地域の境界線に達するとパニが跳び起きた。それから驚くようなことが起こった。犬は牙をむきだしてうなりもせず、跳びかかる構えもしないで、自分の見張りである警備の男の方をちらっと見やり、それからまたアンテークの方へ振り向くと、うなり声を立てないままじっとみている。瞬間のできごとだった。ぼくも見張りの方を見た。見張りは遠く離れたところにおいて、鳥をめがけて石を投げたりして退屈を紛らしている。パニはと見

ると、アンテークの片足が三フィートとは離れていないところまで寄っていた。もちろん、かれはカボヤ見張りの親衛隊員に見られるかも知れないのに危険を冒していた。だが、作業を続けていたので気づかれなかった。そしてパニは相変わらず何もしなかった。うなり声もあげなかった。かれがその場をはなれるとまた横になった」

「そうか、犬はアンテークを知っていたけれど、それを隠していたんだ。君はそういつているわけなんだな」とヒューがいった。

「そうとしか考えられないわよ。全くはっきりしてるわ」とリビーが感嘆するよういいた。

「ぼくにははっきりしてないね」

ドーナトは黒い瞳をきらきらと輝やかせながらいった。「じきにどうだったのか、もっとはっきり結論することができるだろうよ、、、その夜アンテークは熱に浮かされていた。ある考えに取りつかれてどうしてもそれを払いのけることができなかった。君がいうように、かれはパニが自分を知っていると確信しただけではなくて、それ以上のことを確信していた。おれと同じように、パニは自分がドイツ人のとりこであることを知っているんだ、とアンテークはぼくたちに誓っているのだった。『おれはやつらのために強制的に道造りをさせられている。パニのやつは捕虜になって警備の仕事を強制されているんだ。でも、パニは自分が捕虜なのを知っている』とかれはぼくたちにいった」

ここまでいうとドーナトは言葉を切って、ほほ笑みながら首を横に振った。

「それ以外にはどんなこともアンテークには考えられなかったのだよ。どんな犬だってそんな筋道の通った判断力を持っているはずがない、とかれにいったのは、ぼくばかりじゃなかった。ほかの者たちもそうだった。お互いに頼りあっているぼくらのグループがあつて、ぼくたちは仲の良い同士だった。一人はアンテークと同じように農家の青年で、もう一人は若い神父で、あとの一人がとっても面白いことに獣医だった。アンテークが自分の犬のことで取り乱していると、だれよりも主張したのはこの獣医だった。『いや、パニの眼を見

れば分かる。あいつがおれに何をいっていたか、おれは知っている』とアンテークはいい張った。そして次の朝、かれはぼくたちを集めてこういった。『パニとおれは抜け出すぞ。みんなも腹をすえておいてもらいたい。おれが走って逃げる。その時がみんなにとってもチャンスだ。いつやるか、それは分らない。眼をよく開けておいてくれ』とね」

ドーナトはちょっと休むと、頭を撫でて紅茶を少しすすった。「ぼくらの話し合いは効果がなかった。ぼくらはたとえパニが襲いかかってこなくても、あとの二匹がすぐに追っかけてくるだろうと指摘した。これに対してアンテークは、棒切れか何かを持って逃げるつもりだ、パニと自分とで犬をさばいてみせるといい返した。獣医がパニをもっとよく試してみるようにいうと、アンテークは、初めての機会を見逃すという手はないだろう、ひょっとするとパニは別の作業部隊に替えられるかも知れない、と応酬した。そういうわけで、その朝どうしようか決めかねたまま、ぼくはアンテークの例にならうことにした。割り当てられたパンを食べないでシャツの内側に入れた。ところが、作業が始まって一時間後にぼくは脱走する考えを捨てた。砂利をシャベルにすくって放り投げたところ、たまたま小石が弾いてカポの脚に当たった。カポが棍棒でぼくの背中を力いっぱいぶん殴ったのでぼくは地面に倒れた。すると、カポは倒れたぼくを足で蹴った。そいつが蹴りやめるまでに、ぼくは脱走することなんて不可能だと知った。ぼくはシャベルを持ち上げるのにさえ渾身の力を振りしぼらなければならなかった。それから少し後に、アンテークも脱走の計画を断念せざるをえないだろう、とぼくに確信させるようなことが別に起こった。捕虜の一人が——その男は病気で高熱に浮かされていたが、それを隠そうとしていたということをぼくは後になって知ったんだが——かれが熱い日射しを浴びて譫妄(せんもう)状態になった。シャベルを手に持ったまま盲のようにパニの方へ歩き始めた。パニは恐ろしい警告のうなり声をあげて跳び起きた。と同時に、その男はふらふらとよろめいて卒倒した。男はパニのいる側とは逆の方向へ倒れたが、もしパニの側へと倒れていたらパニはどうしていただろうか。ぼ

くの考えでは、パニだって訓練されたとおりのことをしただろうと思うが、実際となると何ともいえない。それはともかく、アンテークがそのすぐあとにぼくの横を通り過ぎたので、ぼくは小声でかれにいったんだ。『逃げるのはやめろ!』ってね。かれは何もいわなかった。顔は石のようだった——そして数分後に彼は脱走した」

ドーナトはほのかに笑みを浮かべ、気の弱そうな口調で静かにいった。「それじゃ、ぼくらがいた所の地形を説明しておこう。作業部隊は道路に使うために山の斜面から石を砕いて取っていた。例の先頭と後尾に親衛隊員がそれぞれ一人ずつ付いて、ぼくたちはたぶん七十五ヤードくらいにわたって広がっていた。山の斜面は険しくそそり立ち、樹木はほとんど生えてない。だから、そこには犬は一匹も配置されていなかった。もう一方の側は、わずか三十フィートかそこから始まって一面、ひまわり畑だった。君たちはそんなに広い畑などおそらく見たことはないんじゃないかな。種を取り入れる頃になると、ひまわりは七フィートから八フィートの高さに成長するんだ。そんな畑に逃げこめばたちまち見えなくなってしまうのは分かりきっている。しかしながら、そちら側には犬が二匹配置されていた。パニが近くに、ドーベルマンが約三十ヤード前方に。ところで、ぼくらのすぐそばにいたカボが、気を失って倒れているさっきの男を、トラックのところまで運んでいくように二人の捕虜に命令したんだ。カボがそちらに気をとられている間に、アンテークは手押し車を下に置いた。そしてあらかじめ車に隠していたバールをひつつかむと、とつぜんひまわり畑へ逃げこもうと全速力で駆けだした。パニの片側五ヤードあたりにきて、かれが『パニ、来い!』と叫ぶのが聞こえた。それ一言だけであとは何もいわなかった」

「で、パニは?」とリビーが急にせきこむように聞いた。

「一瞬、ぼくの血は凍った」とドーナトはいった。「パニが恐ろしいうなり声をだして跳びあがったからだ。一つ大きくジャンプすると、犬はアンテークのすぐ背後に迫った。つぎの瞬間、ぼくは犬がかれの背中に跳びかかると思っ

た。ところが、まるで鎖でぐいと急に止められたかのように犬はそのまま止まってしまった。ぼくは、、、」

「臭いで分かったんだわ！」とリビーが興奮して口をはさんだ。「パニはアンテークだと気づくまえに反射的に止まったのよ」

「そう、ぼくもそう思うね」とドーナトが同意した。「でも、もっと込みいっていたんだ。その時、いろんなことが同時に起こっていたからね。アンテークがびっしりと生い茂ったひまわりの中に見えなくなった。それと同時に三十ヤードばかりぼくらの後方にいた見張りが発砲した。男は軽機関銃を持っていて、アンテークが逃げた方角一帯を撃ちまくったんだ。挿弾子に入った銃弾をぜんぶ撃ちつくした。何発ぐらい撃ったか分からないが、ものすごかった。その一方では、先頭にいた見張りがそばのドーベルマンに大声で命令している。犬はまっしぐらに畑に駆けこんだ。見張りに鎖を放たれたシェパードがすぐ後ろに続いた。それからその見張りもライフル銃を持って畑のなかに走って行った。このようなことがどれくらいの時間に起こったか、五秒だったか十秒だったか三十秒だったか、ぼくはよく覚えていない。けれど、そうしている間にもパニはその場にうずくまるようにして全く動かなかった。その時のぼくには何も考える余裕などなかったけど、あとになってパニの態度が分かるような気がした。パニは自分の中で対立する力に全身が麻痺していたんだ。アンテークのいったことは半分しか当たっていなかった。パニはかれだと知って襲いかからなかった。が、親衛隊員から訓練を受けていたのでかれといっしょに逃げることもできなかったのだ。かれが思っていたよりも深い意味でパニは囚われの身だった。ぼくは確信しているけれど、パニが動かないでじっとしていたその数分の間に物凄い葛藤が行われていたんだね。どこでだって？パニの感情の中でだろうか、心の中でだろうか、頭の中でだろうか？その全部でだとぼくは思うね。ちょうど人間に生じるような葛藤があったんだね」

「おいおい、それじゃ、どうして、、？」とヒューがいかけた。

「まだぼくの話聞いてないよ」とドーナトが感情的にさえぎった。「だっ

て、つぎの瞬間にパニは銃弾でけがをしてたんじゃないかと思えるような遠吠えをあげたからね。それはただのうなり声や吠え声とは違って、苦痛を耐えているような傷ついた時の遠吠えだった。そしてあっと思うまにひまわり畑に跳びこんでいった」ドーナトはひたいから流れる玉の汗を神経質な手つきでぬぐった。「心臓の鼓動が止まっても人が生きつづけられるとすれば、パニの姿を見失った時、ぼくの心臓は止まった。パニはアンテークに付いて脱走しようとしたのか、それともほかの犬といっしょに彼を噛み殺そうとして走っていったのだろうか？ぼくには分からなかった。何もかも混乱し、ぼうっとかすんで悪夢だった。アンテークはどちらへ逃げていったのか？ひまわり畑は六百ヤードも深かっただろう。ぼくたちのところから下に傾斜して広がっていたので向こう側まで見えた。畑の先は牧場で、牛がおり農家があった。牧場の奥は登りになって樹木の茂った山があった。アンテークはきっとそこへ逃げるだろう、とぼくは思った。とつぜん、畑の奥から犬たちの狂暴な吠え声をした。『つかまった』と思った。ぼくは思わず叫び出し、それを抑えることができなかった。けたたましい吠え声が続き、ライフルの発射音が六発くらいだったか聞こえた。それから急に死の静けさのようにしんと静まり返った。それは続いた。その静寂はずうっと続いてぼくはお墓に入れられているような気がした。だが実際は、ものの二、三分しかたっていないはずだ。その時アンテークの姿が見えた」

ドーナトの黒い瞳はきらきらと輝いていた。かれはアンテークが生きているのを見た瞬間を思い起こすように話しながら、ぼくたちが前にいるのもほとんど気づかないようすだった。「かれが農家の近くを走っているのが見えた。みんな、かれに気づいた。後に残っていた親衛隊員もただ見ていた。だが、そんなに離れていては軽機関銃も役にたたないのでどうしようもなかった。アンテークは納屋の後方に走りこんだ。つぎに姿が見えたのは、坂を登って樹林の方へ向かっている時だった。ぼくは実際にはかれが森へ入るのを見なかった。ちょうどその時、悲劇が起こったからだ。ぼくの二人の同志、獣医と神父は脱走していなかった。それが急にいまになって——どうしてそうしたのか？若い神

父が急に畑の方へ駆けだしたのだ。狂気の沙汰だった。親衛隊員は配置についていたのでぼくたちと畑の間の地域を見通すことができた。やつはぼくらの友人をずたずたにした」

一瞬の沈黙があった。リビーがたずねた、「それでパニは？アンテークとっしょだったの？」

「いや。やがて畑からさっきの親衛隊員が出てきた。左腕は血まみれで、軍服の前は引き裂かれていた。びっこを引きながら黒いシェパードが横に付いていた。噛み裂かれ、血だらけになった前足が一本だらりと垂れていた。ぼくには分からなかったが、ドイツ語を分かる者がいて、見張りが大声でつぎのようというのを聞き取った。パニが——ドイツ語で名前を言ったのだが——気が狂って、ドーベルマンののどを引き裂き、シェパードをびっこにした。親衛隊員が追いつくと、かれもまた攻撃された。それでパニを撃ち殺したのだ」

「あら、まあ。最初にあなたがいったとおりでわ。たいへんな窮地に立たされて、、、、とリビーは感きわまったように叫んだが、最後までいわずに夫の方に向くと小声で話した。「お願いだから、軽がるしいコメントはよしてね。わたし、そんな気分じゃないから」

ヒューは穏やかにいった、「ぼくだって浮わついた気分じゃないよ。とても感銘させられたよ。ひょっとして、アンテークがどうなったか知ってるの？」

「うん、知ってるとも。かれはパルチザンの仲間に入った。戦争中も生きのびてまた百姓をしているよ。時どき、ぼくらは手紙をやりとりしてるがね」



訳者あとがき

アルバート・マルツの短編小説「百姓の犬」(“The Farmer’s Dog”)は、1968年7月13日の「サタディ・イヴニング・ポスト」紙に「捕虜の犬」(“The Prisoner’s Dog”)というタイトルで発表された。作者の二冊目の短編集『ジャングルの午後～アルバート・マルツ短編選集』(*Afternoon in the Jungle: The Selected Short Stories of Albert Maltz*, Liveright, 1970)に収録される時、タイトルが替えられ、内容にも若干の手入れが加えられている。本訳の底本には、1971年に出版されたペーパーバック版を使用した。